

「牧師室」(2016年3月13日)

3月11日を中心に、テレビ、新聞等で非常に多くの「東日本大震災5年」に関する報道がなされました。その多くの中の一つ、「朝日新聞声欄」に記された文章を紹介し、考えて見たいと思います。投書の主は早乙女勝元さんで、戦後一貫して3月10日の意義を強調されて来た方です。今回は、3月10日と3月11日を比較しながら、文章を続けています。

自身投書の数日前、被災地を訪れ、福島第一原発による被害状況を見て、こう記されています。「車でいくら走っても、除染の廃棄物袋が平積みで、かつての住宅街は一面雑草地だった。大空襲の惨状と重なるが、決定的に異なるのは、戦中の私たちはすぐに焼けたトタンを拾い集めて、雨露をしのぐ場を確保したことだ。国破れても山河ありだったが、こちらでは生活の基盤たる故郷と日常を失った人たちが多し。胸がふさがる思いがした」。

3月11日の多くの人々が「複雑な気持ち」を抱いていることでした。その様な思いを、至る所で持っておられる人たちが多しのです。

あの時のことを「思い出したくない人」もあり、「忘れてはならない」と言う人もいました。人々の大震災5年後の思いは、このように複雑なのです。しかし、「命を第一義とするならば、戦争も原発も次世代にあってはならない」と言う早乙女勝元さんの意見に、わたしも賛成です。

「戦争を始めるのも人間、であれば、終わらせるのも人間」と言う沖縄平和記念館入口に記された言葉を思い出します。